百科㊴-71 水経注 317下 ㊥1057の図 洛陽伽藍記 61 69 119(東里) 1,340 1/2

服㊥1064-4/4 同文㊥1064-3/4 水経注 317 ㊥1064-3/4 洛陽伽藍記 69 注18

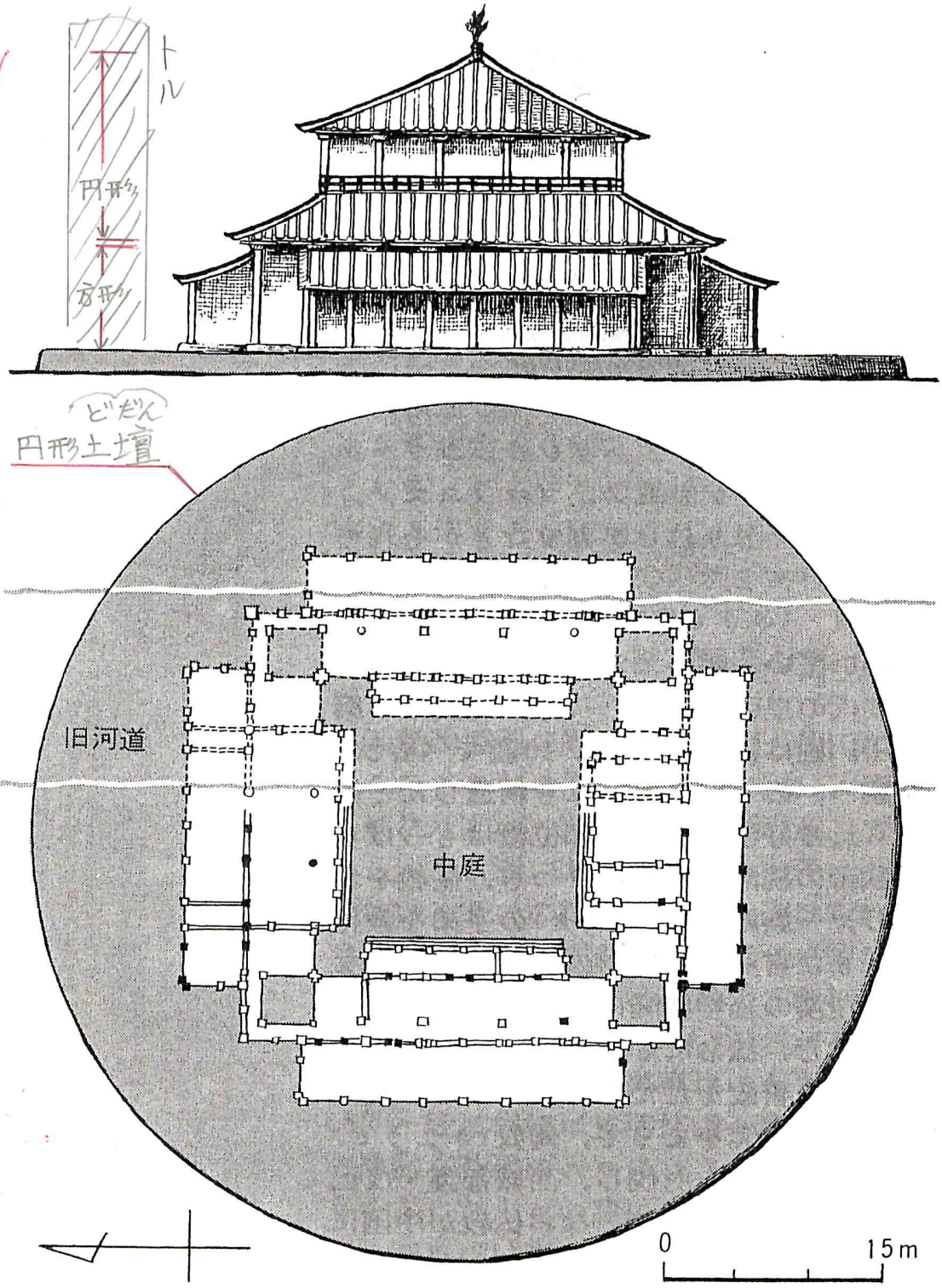
由1067 大カンワ516 太＝大(だい)

城南地区

古来、中国で(天子の学校)は上帝を祭る所、霊台(気象台)は天文を観察する所、辟雍は大学(天子の学校)は学者を集める所、太学は学者を集める所、高祖を修める所、明堂(政堂)は天の神を祭る所、霊台(気象台)は天文を観察する所、辟雍は大学(天子の学校)は学者を集める所、高祖を修

手持ちの
百科事典(30)-72P

・右頁にはみ出て大きく掲載下さい。



1340P-2/2

天壇(円形)
(株)1373P
-2/4

1479

(株)10647/5/9

14QGゴ4

第250図 『明堂址』(平面と立面)

12QGゴ4

・西安市西郊で発掘され、明堂址とみられている。

・東半は旧河道だったため消失しているが、直径65mほどの円形土壇の中央に中庭をおき、四方に長方形の建築物を建て、四隅で接続させている。

13QGゴ4

『世界大百科事典』平凡社、1978年印刷、<明堂>参照。《文物参考資料》(1957)による。

洛陽伽藍記61P 318 ㊇1064P 5/5

㊈1063P 1/2

洛陽伽藍記61P

1,341P

北魏時代の開陽門（宮城南面東端の門）の外、御道の東には、漢代の国子太学（国子学ともいう）の建物があった。（「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、六一、三一八頁参照）

また、城南地区の霊台の南、洛水の近くには、北魏よりも前の時代に建てられていた豪壮な館があり、そして美々しい家が多数あったようである。

ところであろうか。（「洛陽伽藍記」巻第三「城南」「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、六一頁参照）

米

「だ」でない。

北魏時代の開陽門（宮城南面東端の門）の外、御道の東には、漢代の国子太学（国子学ともいう）の建物があった。（「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、六一、三一八頁参照）

第十四章〈市や諸施設を取り囲む外郭城〉

の項において既述）

トル

また、城南地区の霊台の南、洛水の近くには、北魏よりも前の時代に

豪壮な館があり、そして美々しい家が多数あったようである。

ところであろうか。（「洛陽伽藍記」巻第三「城南」「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、六一頁参照）

米

コクヨ　ケ-20　20×20

城南突出地区

トル

それでは次に、城南地区を出て、洛水の南の様子を見てみよう。

トル

宮城の正門の平昌門の外四里、洛水のほとりに至ると浮橋の筏または船を並べて渡した橋といわれる）があった。

「高い岸が水に面し、清らかな波が東に流れていた」

浮橋の〈北端と南端の〉両岸には、華表〈高い柱の上に横木を渡したもの〉があった。全高二十丈。華表の上には鳳凰が作りつけてあり、天をも衝かんばかりの勢いであった」

という。〈「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、六一頁、六四頁、七二頁注五三〈華表〉参照〉

トル

なお、高い柱の上に横木を渡したこのような華表は、城や役所や墓所の前に、門として建てられたという。〈「漢和辞典」小林

コクヨ ケ-20 20×20

信明、小学館（華表）参照

なお、日本の「神社」や「陵墓」の前などにも□華表□（＝鳥居）が立てられていて、類似性がうかがえる。

●多種の様式がある鳥居のうち、「神明鳥居」は最も素朴で、二本の垂直の掘立柱と笠木（上端にさしわたした横木）および貫（笠木の下の横木）の四本の丸太で造られる。

●皮付の丸太で、黒かずらでくくる黒木鳥居はなかでも原始的で、大嘗祭の悠紀殿などに用いられる。皮をはいで造ったものを白木造という。

●上端の丸太は、向って左側を本にするのが普通で、本のほうが太く不均衡にみえる。

●伊勢神宮の鳥居はすべて笠木を五角または四角に削ってある。

●けれども伊勢神宮には、門扉のついた形のものがあり、垣に接して、宮殿の門とした性格を、はっきり示している。

●中国の華表が、日本の鳥居の原型だとする

コクヨ　ケ－20　20×20

説が広くおこなわれているが、鳥居の起源や語源についての定説はない。

（『世界大百科事典』平凡社）

参照

● なるほど、定かならぬ点もとはいえ、日本の起源は、もしかしたら中国の『華表』にあり、高い柱の上に横木を渡した我が国の鳥居の原型ではないか。

（『貴州』）

● ことに、『伊勢神宮』内宮の五十鈴川にかけ渡される『宇治大橋』の両岸には、それぞれ華表（鳥居）が立てられていて、注目される。（写真図版219）

（『五十鈴川にかかる宇治橋』）

参照

などと想像される。

浮橋の南、円丘（天子が天を祀る円い壇丘）の北、洛水と伊水の間に、御道を挟んで東にな四夷館（金陵・燕然・扶桑・崦嵫）があり、御道の西にも四夷館があった。（第十八章八扶桑館）

（帰正・帰徳・慕化・慕義）

そうのむろつみ

の項において既述

陽明カラー版64ページはさむ「神宮」5ページ

浮橋の両岸（北と南）

1,342ページ～3/4

百科22-583ページ

元523ページ

元1908ページ

元2011ページ

元2086ページ

元2095ページ

小町88ページの図

・カラー
・頁の上（1/4頁）に、上人はみ出し大きく掲載下さい。
※もうちょっと、明るくならないでしょうか。

（鳥居から、下まで）
※縦の白い線状の光を除いて下さい。

1342P-4/4

652

↑鳥居のなかの白い点をトル

14DG

写真図版219 五十鈴川にかかる宇治橋 ← ㊟1342P-3/4 15行

少し小さいポイント 12DG 13DG 粉アキ

『渡辺義雄の眼 伊勢神宮』渡辺義雄、講談社、1994年8月25日発行、28頁

参照。

12DG

・宇治橋の両岸（東と西）に鳥居が立てられている。

景初暦

浮橋から南へ真直ぐ続く御道の突き当りには、円丘（委粟山）があった。

冬至の日に、天子がこの円形の壇において天を祭るのだという。

もしかしたら、やがて訪れる景初三年（二三九）の最初の十二月の冬至の日に、難升米たちは、天を祭る為の円丘の壇において一心に務めをはたす幼帝「曹芳」の御姿を拝すことになるのかも知れない。

魏の明帝の景初元年四月から用いられてきた景初暦を、ふたたび元の夏暦（陰暦）へ戻すに当り、景初三年には十二月が二回予定されていて、冬至は、最初の十二月中にやってくるのである。（第24表参照）

なお、

(1)「夏暦」（陰暦）（漢暦）景初暦以外の魏暦

(2)「殷暦」（魏の景初暦）

(3)「周暦」（古代倭国では、周暦を採用して

㊥1,724P 1行
㊦1,755P −4/5 殷の正月
㊧2,413P
㊨3,149P −1/2
㊩3,847P
㊪2687P −5/8 4行

・頁の上半分に、
左右を大きくはみ出させて掲載下さい。
・重要な表です。

1,344P

15QG

第24表　夏暦〔＝陰暦〕・殷暦・周暦の相互関係

不知火㊧1651P −1/2
宇美㊨1652P −2/3

㊥1343P −1/2
景初元年(237)
4月から景初暦

	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
夏暦〔＝陰暦〕 漢暦、景初暦以外の魏暦				・ 冬至						・ 夏至		
殷暦および 魏の景初暦	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
				・ 冬至						・ 夏至		
周暦および 古代倭暦	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
				・ 冬至						・ 夏至		

（不知火）
[八朔（陰暦8月1日）の夜明け前に出現]
小さな字
ここを広げたい
もっと間隔を広げる

＊陰暦11月の中の卯の日に「新嘗祭」。

ここに、文字を入力しないで下さい。

いたのではなかろうか。

三つの暦（三統という）の関係は、非常に煩雑で理解しにくいので、一括して、第34表にまとめてみた。（「三国志」(1)世界古典文学全集、筑摩書房、一〇四～一〇六頁、一一五頁、一四七頁注(1)(2)(3)、「洛陽伽藍記」、水経注」中国古典文学大系、平凡社、六四頁、三〇二頁等参照）

冬至の日の円丘での祭り

円丘（円壇ともいう）は、古代中国で天子が冬至に天を祭るために郊外に築いた円形の壇のことである。（写真図版220参照）我が国でも円丘が築かれ、同様の儀式が執り行なわれたという。（「広辞苑」岩波書店、一九九八・二〇〇四年版「円丘」参照）

北京の天壇祈年殿の写真

冬至の日の「円丘」での祭り

（イントロ）

「円丘」での天の祭りについての文献を見てみよう。

周末から秦・漢時代の儒者の古礼に関する説を集めた書「礼記」の「七代の更めて立つる所の者は禘郊祖宗のみ」（後漢末の学者鄭玄の注釈）に、「禘は昊天（おおぞら）を円丘に祭るをいい、郊は上帝（天帝）を南郊に祭るをいい、祖宗は祖先を明堂に祭るをいう」とある。（「三国志」（工）筑摩書房、一一三頁）

後漢書」の光武本紀には、

(1)「建武二年（二六）春正月壬子、起高廟（建武二年（二六）春正月壬子、高廟を起つ）

(2)「中元元年（五六）初起明堂・霊台・辟雍及北郊兆域」（中元元年（五六）初めて明堂・霊台・辟雍及び北郊の兆域を起つ）

(3)「中元二年（五七）春正月辛未、初立北郊祀」

（中元二年（五七）春正月辛未、初めて北郊の祀を立つ）

夏至に地を祭りたという（「史記」）

郊外の祭場のことである（天を祭る）

コクヨ ケ-20 20×20

石土。東夷・倭・奴国王遣使奉献ス

とある。

●洛陽に都を移した後漢は、洛陽の地に祭祀の為の諸施設を次々と設けていったのだった。

つまり、建武二年（二六）正月には太廟・大社を起し、南郊に祭天の壇を立て、中元元年（五六）には北郊において土地の神を祭った。ミの頃、東夷の倭奴国王が遣わして使者が奉献した、というのである。（「古代中国の都市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、八七・八八頁参照）

しかしながら、後漢末の混乱期に、神の祭りは廃止されたという。（「三国志」（工）筑摩書房、一〇六頁参照）

だが、魏の景初元年（二三七）十月二十一日明帝は洛陽の南にある委粟山に円丘（冬至の日に天を祭る所）を造営し、同年の（景初暦）十二月十九日の冬至の日に、はじめて祭祀を

コクヨ ケ-20 20×20

行なった。（『三国志』(エ)筑摩書房、一〇五六頁参照）

□とはいえ、この□禘の祭りⓑは、西晋時代末期以後長らくとだえてしまい、北魏の時代に再興されたようである。

『伊水はまた東北に向かい、洛陽県の南にいたって円丘の東をすぎる。』大魏（北魏）が天を郊祭したところで、漢の故事にならって建てたのである。□後漢書Ⓒの郊祀志に

□水経注Ⓐ伊水条に『阪のような』記されている。

（二六）

建武二年初めて郊北（天地の祭りの場）を洛陽城の南七里に制し、圜壇八陸（円壇に八つの階段を設けたことか）をつくる。中にまた重壇をつくり、天地はその上に位するゝみな南面し、その外壇の上を五帝の位となし、その外に遺壇を作り、重営はみな紫にしても って紫宮にかたどる、とある。礼を施すに天子は大裘（『裘』は毛皮の衣服）を着て、冕冠をかぶり、大夫以上の者が着用する礼裳の冠）をかぶり、昊天上帝（『昊』は、おお

世界古典文学全集

コクヨ　ケ-20　20×20

H3.9.30(月)は
H10.4.17(金)
天つき改行
改行
という。

古代中国の都市とその周辺 90P 大カンワ 726P 平ジン 城シ 七イ 重箱よみ
同文P 1132
1155P-1/2 表
105P 図
1,349P
三国志 魏 1-406P
三国志 1-409P
大カンワ 2125P
東洋史研 117P 賈似道 南宋の宰相
長分橋由 1164P 但し、西晋代に作られて
1164P トル
小門 51P 1/2 後漢洛陽図
105P-1/2
改行
HV

なおこの近傍に、西晋時代となった後も長分橋」が作られるなど、第十四章「子午線」の項において取上

城西地区

「夕陽亭」

曹魏の洛陽宮城西面北端の門である閶闔門を出て西方七里のところに、最外郭城の西門があったのかも知れない。●そこに、漢代には、「夕陽亭」が置かれていたようである。（「洛陽伽藍記」第四巻〈城西〉巻頭の第8・9図参照）

在京官吏の「赴任転任の」送り迎えは、多くここでなされたといい、晋の開国の元勲（建国の功臣）賈充（二七一二八二）が長安へ出陣した際、百官がここで送別の宴を張った逸話は、特に有名だという。（「洛陽伽藍記」水経注」中国古典文学大系、平凡社、七八、八六、九〇頁参照）

さて「洛陽伽藍記」巻二七「百官志」四「城門校尉の条には」次のように述べられている。

「洛陽城十二門」其正南一門曰平城門。北宮門曰蘭庭門。其餘上西門、雍門、廣陽門、津門、小苑門、開陽門（大カンワ 1788P）耗門（耗門）中東門、上東門、穀門、夏門（元 332P）、凡十二門。（注。蔡質漢官儀曰」雒陽二十四街、街一亭。十二城門、門一亭」とある）

●これによると、（後漢代に）南面の正門（イコール）平城門を初めとして、合計（ワ）十二の城門があった

注 次頁1行

1131P-1/2 平城門

659

小門 51P 後漢洛陽

●[illegible]さらに、その注から、

〈雒陽（雒陽宮城内のこと）は、二十四の街に区画されていて、各々の街には治安取締りのために一亭が置かれ、十二の城門それぞれにも一亭が置かれていた〉という情況が分る。（「在代中国の都市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、九〇、九一頁。）

＊なお、十二の城門（十二の宮城門）に設けられた亭（あずまや）は、どんなものだったのか断定できないが、「[illegible]もしかしたら、「楼門」の上層部（通路の上の部分）のことを指していて、監視の為に四方が吹抜けになっていたのかも知れない。（第41図〈洛陽宮城門想像図〉参照）

●最外外郭城の「西門」にも警備の為の「亭」が置かれてたから、別名「夕陽亭」と称されたのであろう、と推察される。（小林[illegible]）

また、「三国志」魏書、明帝紀、太和元年（二二七）条に、

「（明帝は）秋八月、西郊で月を祭った」

とある。（「三国志」(1)筑摩書房、八九頁。既述）

●後漢、洛陽の都の西郊（西の郭門外）に「月の祭壇」があったのだろう。と思われる。

●西に連らなる山々のかなたに陽が落ちると、やがて、[illegible]、[illegible]、[illegible]

H30(2018)3,15(木)～3,18(4回)
令和元(2019)5,27(月)～5,28(3回)
令和元(2019.)12,31(火)～令和2(2020)1,1(3回)

1,351P

トル 12/31

月夜

李白

うから、その美しい姿を現わしたかうか。

十五夜の月が

難升米と牛利とは、月の光の中に立ちつくして打ちながめる者達の目には、洛陽城や城を飛ちながめる者達の目には、洛陽城や城を飛ちながめる者達の目には、洛陽城や城を飛

洛陽の町の区画について

■ こころみに、洛陽の街の区割りについて考えてみると、次のようになろう。

■ 洛陽の都は、いったいどのような町割りになっていたのだろうか。

■「洛陽伽藍記」巻第五〈城北〉の末尾近くに、こう記されている。

「京師は東西二十里、南北十五里で、戸数は十万九千余であった。朝、社、宮室、府曹（役所）のなかは、三百歩平方を一里〈ブロック〉のこととする。一里は坊〈ブロック〉の四つの門があり、門には里正二人、吏四人、門士八人を置いた。合わせて、二百二十の里があった」

というのである。（第十四章「洛陽の最外外京城」の項において既述）

■ また、「一里を一坊、ブロック〉について次のような注釈がなされている。

「一里の四方に牆壁をめぐらし、里内には十字状に交叉する道路を通じ、東西南北

ここに記されている〈北魏洛陽城の〉

洛陽がらんき 104P
ようへき 1109P
タイトル 1175P
長安十六坊図 1361-3/4 5行
平城京「坊」 1360P 1355P-2/2
次長々の内を門 (外周外大路含む) 1,352P
大カンク 2332
小林485P
曹(役所)
日吹 1176P
洛陽がらんき 103P
市 1066P 1073P
1355P-九9行～ みることが出来るの 1176P
小林87P
1130P-2/2 1176P 8行
小林196P
1356P
1361-3/4 13～14行 洛陽の坊 十字状の小路 藤原京
「ついて」この頁3行, 次頁19行
成 1361-3/4
コクヨ ケ-20 20×20

魏書 元529P

洛陽へ遷都 洛陽がらこ元114P 団1159P-1/3 中1-10行

1,353P

中口の都関連のものとともに記されていた。

団1180P
団1325P-1/2 未3行

たそれぞれ里門を設け、日没とともに門を閉ざした。そしてこの四つの門には、それぞれ小管理の役人（里正二人、吏四人、門士八人）が常駐していた」

という。（「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、一一四頁注九二参照）

● 例えば「上商里」は、そうした里の一つだったのであろう。（般の頑民の居住域）

＊尚、里の四方に牆壁があり、日没とともに門を閉ざしたというのだから……（北魏の時代には夜間外出禁示令が出されていたのだろうか。

察するところ、北魏が洛陽を首都と定めた当時（四九三もしくは四九四年）洛陽の都の荒廃はひどく、京師の町割りなど、ほとんど残っていなかったに相違ない。

● そこで、北魏の景明二年（五〇一）に市域の大工事がなされて、後漢・曹魏・西晋のミヤコの町割りに復したのかも知れない。

この景明二年（五〇一）の洛陽城の大復旧工事について、「北魏の史書である」「魏書」の広陽王（元嘉）伝は、こう述べている。

↑ 線9行 663「のだから」次3行止むなし 参照

「京の四面に於て、坊三百二十を築く。各々周一千二百歩」

という。

＊なお、「坊」を正方形と仮定すると、（ブロック）一里＝三〇〇歩なのだから、周一千二百歩（＝四里）の坊というのは、一辺は三百歩（＝一里）である。

という計算になる。（「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、一九七二参照）

ところが、同書「魏書」世宗紀には、「三百二十三坊」と記されている。（「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、一九七二参照）

京の四面に、一里四方の正方形の坊を、三百二十築いた

と述べている。

北魏代の史書

魏書

つまり、「魏書」広陽王（元嘉）伝は、

中国古典文学大系、平凡社、一九七二参照

「京師東西二十里。南北十五里。廟社宮室府曹以外方三百歩。為一里。里開四門。置里正二人吏四人門士八人。総二百二十里。按城之大小。見上文而陽衒之増廣而言者。蓋兼城之外也。又按宣武景明二年。発畿内夫五萬五千人。築京師三百二十三坊。四旬而罷。蓋廣陽王嘉所謂云。京四面築坊三百二十。各周一千二百歩」

とある。

北魏洛陽の社会と文化

服部克彦、ミネルヴァ書房、一九八四参照

コクヨ　ケ－20　20×20

タイトル ㊥1184P-½ ㊦1185P 5S里 1,355P-½ 20×15=300里 ここ

洛陽伽藍記 111 北魏洛陽の…63「 ㊦1352P 14行 14行

すなわち、

「洛陽伽藍記」巻第五〈城北〉には

「二百二十里〔北魏代の史書による〕」

「魏書」には、「三百二十坊」、あるいは

「三百二十三坊」

と記されているわけである。

いずれが正しいのか、にわかには決しがたいが、次のように考えてみることが出来るのかも知れない。

東西二十里、南北十五里の境域には、三百の里が作られ得る。（「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、一〇四、一一四頁。「北魏洛陽の社会と文化」服部克彦、ミネルヴァ書房、六三頁参照）

この三百里のほかに、洛水の南に二十里（一方五里で、四里×五里＝二十里）があったとすれば、合計三百二十里となる。（第十四章〈浮橋。城南突出地域〉の項参照）

ここに、三百二十里から、

(1) 九六城域、およびその外周の居住を

最外外郭城内

665 ㊥1046P 後漢 地を300里余と称す ㊦1356P 7行220里

※それにしても実は『三百里』と述べている書がある。

① 『後漢書』郡国志「河南尹（洛陽のこと）の条の注に、次のように記されている。

晉、元康地道記ニ曰ク。城内南北九里七十歩。為ス地ヲ三百里ト。頃ハ城東北、陽ニ周、威烈王ノ家アリ」

という。『第十四章』『文献』において既述

また、

② 『歴代帝王宅京記』（顧炎武）（一六一三～一六八二）著、巻七、雒陽ニ周代の項の注にも雒陽城の規模について、こう記載されている。

「城、東西六里十一歩南北九里一百歩。晉、元康地道記ニ曰ク。城内南北九里七十歩。為ス地ヲ三百頃（里）一十二畝三十六歩ト。城東北、陽ニ有リ威烈王ノ家」

とある。『第十四章』『古代中国の都市とその周辺』服部克彦、ミネルヴァ書房、一〇頁参照）

もしかしたら、①②共、最外郭城内の総面積が『三百里』であったと述べているのかも知れない。

コクヨ　ケー20　20×20

許さない一里塙の空地の

(2) 『三ヶ所の市』(周りが八里の広さの市)(巻頭の第11図を、仮りに差し引いてみたい。

● 三百二十里から、

(第十四章〈市場〉の項参照)

(1) 南北十一里×東西八里＝八十八里

(2) 四里×三ヶ所＝十二里

を差し引くと、『二百二十里』となる。

北魏代の庶人は、この地域に住んだのであろうか。

『魏書』食貨志には、「……百二十三万……」とあるが、これは、宮城域および三つの市を除いた〈最外郭城内の〉居住区数である。

さて、先に述べたように、『後漢書』巻一七、百官志四、城門校尉の条の注に、

〈雒陽(雒陽宮城内のことであろう)は、二十四の街に分けられており、各々の街には治安取締りのための『一亭』が置かれ、十二の城門それぞれにも『一亭』が置かれていた〉

と記されている。(第十八章〈城西地区〉の項において既述。)巻頭の第8図〈後漢雒陽城想像図〉参照)

コクヨ ケ-20 20×20

＊曹魏・西晋・北魏代の庶人は、この二百二十里内に住んだのであろうか。（巻頭の第9・10・11図参照）

③ 三百二十三坑は、少々やや二いぐ

(1) 後漢の中元元年（五六）には北郊に祭りの場を起こし、翌中元二年（五七）には北郊において土地の神々を祭ったぐ（既述）

この頃、東夷の倭奴国王が使者を遣わして奉献したというぐ（既述）

後漢の都の雒陽へぐ第十八章冬至の日の円丘での祭りに（既述）

(2) 三国志の魏書・明帝紀へ太和元年（二二七）条に、

「二月二十一日、東郊で太陽を祭った」

とあり、

(3) 同書、同年条に、

「秋八月、西郊で月を祭った」

とある。（既述）

・あるいは、洛陽最外外郭城の外側へ北・東・西に、それぞれ祭壇が設けられていたのかも知れない。

田1337P-2/2　田1337P-2/2　田1337P-1/2 14行～

田1128P-1/2 16行～
田1346P 6行～

668 タイトル 田1344P-2/2
田1345P末～
田1346P 9行へ

タイトル 田1124P

H30(2018)12 27(木)～12.28(3回)

1,358'

㊦1355'-1/2 18行 320里

まち 新やり-87' 倭里図 24の街 ㊦1350' 3行

下17/28
12/28

・これらの祭壇が『各一里だったとすると
(5cm)
先述の〈三百二十里(に)三里を加え(もしくわ)れば〉
〈三百二十里＝三百二十三里(坊)〉
となる。(要検討)

(さいだん)(が)(り)

コクヨ ケー20 20×20

『長安』と『洛陽』・『平城京』の対比

一 平城京について、こういわれている。（以下、第26図〈藤原京・平城京比較対照図〉参照）

巻頭の第20図〈当初の平城京構想〉第25図〈坊の中の坪の番号のつけ方（平城京）〉。第27図〈唐の長安城〉参照。一部重複

「平城京は、唐の都長安にならったものである。長安は東西がやや長い長方形だが、平城京は南北にやや長い長方形であり、面積は長安の約四分の一である。奈良盆地のいちばん北に都をつくるのであれば、その面積も形もこうならざるをえなかった。

平城京の東西は約四・二キロ、南北は約四・七キロ。中央を南北に走る幅約八十五尺の朱雀大路が平城京の市街を大きく二分している。東側を左京、西側を右京というが、これは京の北端にある宮城から見てのことである。

そして、左右両京とも、南北を九つに分け、北から一条・二条……九条、と呼んだ。

また、左右両京の条を、東西方向に四つに分け、朱雀大路から数えて一坊・二坊・三坊

「小野小町」87p 改行　奈良の都90p 末2行　索引(ページ)→221p　「ふう」次10p　1,360

元図1366pの図「藤原京・平城京比較対照図」は、図260p→376へ移した。　南1356p

・四坊、と呼んだ。

これらの条と条との間、および坊と坊との間には、幅約二十四メートルの大路があって、碁盤の目のように東西・南北に直交していた。

各坊（＝洛陽の里に相当。ブロック）は、一般に正方形となる。

坊を、東西・南北それぞれ三本の小路（幅約十二尺）で十六に分けて、これを坪とも町ともいった。これにも番号をつける。

元239p　元1497p　元1463p　元1350p　元1431p

（図）

251

（DRチェックした。H30,12,28）

図のとおりである。

地番は、これらの条・坊・坪の番号で示す。

たとえば、巻頭第26図の東市は、左京八条三坊五坪・六坪・七坪・十坪・十一坪・十二坪というふうに表示するわけである。

長安では開化坊、藤原京では林坊などと、坊の名称は全部固有名称であった。しかし平城京では、それをすべて番号であらわし、さらに坊の中の坪の番号の並べ方も統一しているので、地番制度としては、平城京のほうがはるかに進んでいる。

元1431p　元1228p　元1431p

コクヨ ケ-20　20×20

大図④ 1坊の1/16

という。（「奈良の都」虎尾俊哉、講談社、一九八七年参照）

また、こうもいわれている。

「中国の都城と日本の都城の比較研究を最初にされた関野貞先生は、長安城を模倣して平城京が作られたとは決しておっしゃっておられない。むしろ、どういう点が違うかということをかなり強調しておられる。それなのに、どうしてどこでどうなったのか、平城京は長安城を模倣したというふうになってしまって、どの教科書にもそのように書いてある。

平城京と長安城を比較すると、かなり大きく違う点がある。

●平城京は南北に長いが、長安城は東西に長い。

●基礎単位になっている坊の形状もかなり様相が異なっている。

(1) 平城京の坊は、正方形である。

(2) ところが長安城の坊は、皇城の左右および南正面部に正方形もあるほとんどが横長の矩形であり、一か

百科事 27-418 由3972-3/2

1.361-2/4

服 由1361-4/4 13行

中国の「坊制」「中国の帝都」104に詳しい。洛陽も十字状

1字分アキ

も、大きさや形状が異まちまちである。方向および平城京の場合は、正方形の坊が東西南北方向に伸びる各三本の本づつある小さな道によって、十六の坪に区分されているが、長安城の場合、一つの坊内は十字路で四つに区画されており、坊の構造そのものも平城京と長安城とでは違う。

なお、平城京の前の藤原京では、一つの坊を長安城と同じように十字の小路で四つに区切っている。云々」

状

という。（「長安から平城へ」江上波夫編、平凡社、一〇四―一〇七頁、等参照）

3 そして更に、こういわれている。

「唐の長安城と日本の平城京とでは、簡単に両者一致するとは言いにくいのだから、平城京が唐の長安城だけを模倣したというのは少しばかり即断にすぎるわけである」

という。（「中国の帝都」村田治郎、綜芸舎、三七―六頁参照）

トル つまり、

トル

平城京は、長安城にならったものである

トル

3P.6 由1362-1/5 10行

673 由1352 20行 洛陽十字状 由1361-2/4 5行 長安十字状

コクヨ ケ-20 20×20

奈良の都90P「地番制度」

うかゝゝ長安城より整然として、地番制度もすべれている〉というようなことのようである。

それにしても〈長安城をただ単に模倣したというのならともかく〉一体どうして〈

①長安城より以上に整然とした町割りの都城を造り、②合理的な地番制度を採用するようなことが、当時、出来得たのだろうか〈

と疑問に思われる。

恐らく〈

〈この整然とした平城京を造られる以前、

――――はるか昔から、すでにこの日本に、かなり高度な都城築造技術が有ったのであろう〉と推察される〈

と思われてならない。〈この物語の「甚筋」第三編〈平城遷都〉の項において既述〉

□後漢の雒陽には二十四の街があり、各々の街には治安取締りのための「□一亭」が置かれていた。〈第十八章〈城西地区〉の項において既述〉

の姿を現わしていた〉と察せられる。

■参考までながら述べると、『続日本紀』元明天皇の和銅四年（平城遷都の翌年の七一一年）九月四日条に、こう記されている。

〔諸国の役民（人夫）、造都に労きて、奔亡すること猶多し。禁むと雖も止まず〕

とある。

●諸国から平城京の造都の為に集められた役民（人夫）達は、長期間にわたり、よほど過酷な労役（泥まみれの突貫工事）に従事していたのであろう。

●「奔亡すること猶多し」というのだから、〈ずいぶん以前から、――造都の重労働に堪え兼ねた人夫達が、ひっきりなしに逃亡していた〉という情況がわかる。

これらの条と条との間、および坊と坊との間に設けられた幅約二十四㍍の大路が、〔碁盤の目のように〕東西・南北に直交している。

したがって各坊は、通常、正方形となる。

これら各坊を、東西・南北それぞれ三本の小路（幅約十二㍍）で十六に分け、これを坪とも町ともいった。

坪（町）にも番号をつける。そのつけ方は、第28図の通りである。

地番は、これらの条・坊・坪の番号で表わす。

例えば、第26図の左京に見られる東市は、左京八条三坊五坪・六坪・七坪・十坪・十一坪・十二坪というふうに示すわけである。

長安では開化坊、藤原京では林坊と、坊の名は全部固有名称だったが、――平城京では、それを全て地番（土地の一区画ごとにつけた番号）であらわし、その坊の中の坪の番号の並らべ方も統一しているので、地番制度としては、この方がはるかに進んでいる」

という。〔奈良の都〕虎尾俊哉、講談社、八八～九一頁。「長安から平城へ」江上波夫、平凡社、二七頁、四八頁。他参照）

■だが、

「〔長安城を模倣した〕平城京は、

北				
	16	9	8	1
右京	15	10	7	2
	14	11	6	3
	13	12	5	4

	1	8	9	16
左京	2	7	10	15
	3	6	11	14
	4	5	12	13

第28図　坊の中の坪の番号のつけ方（平城京）

『奈良の都』虎尾俊哉、講談社、89頁参照。

■なお、聖徳太子によって作られた『大和三道』（上・中・下の三道）のうちの『下つ道』が、平城京の中軸線をなす『朱雀大路』にあてられていた。（第26図参照）

＊

こころで、今日一般的には、平城京についてこう言われている。〔第20図〈当初の平城京構想（想像図）〉。第26・27・図参照〕

「平城京は、唐の長安城にならって築かれた。

長安城は東西がやや長い長方形だが、平城京は南北がやや長い長方形で、面積は長安城の約四分の一である。奈良地のいちばん北に都をつくるのであれば、その形も面積こうならざるを得なかった。

平城京の南北は約四・七キロ、東西約四・二キロ。

中央を南北に走る幅約八十五㍍の朱雀大路が、市街を大二分している。

朱側を左京、西側を右京というが、これは京の北端にある宮城から見てのことだ。

して、左右両京とも、南北を九つに分け、北から一条……とよんだ。

た、東西それぞれの条を四つに分け、朱雀大路から数一坊・二坊……とよんだ。

(1)碁盤目状の整然とした町割、

(2)合理的な地番制（平城京全域にわたり、同一様式で表示し得る地番制）、

を採用しており、……長安城よりも、一層優れている」

と言うに等しい現代の解釈は、誤っているように思われる。

■恐らく、

《『曹魏』（二二〇～二六五）の時代の洛陽城（第9図）を模倣した帝都（第13図）が我が国に築かれ、……それ以後の約四七〇年間にも及ぶ「都城」築造経験の積み重ねがこの日本にあったからこそ、「平城京」に見られる通りの『高度な都市計画』を立案出来たのだろう》

と推察される。〔「荒筋」第一編【倭国に現出した洛陽城】。第20図〈当初の平城京構想（想像図）〉参照〕

＊

■周知の通り、平城京の北端部には、〔凵形状の〕平城宮（宮城）があった。

●つまり、平城京の南の端の羅城門から人々の居住区である京域内へ入って、朱雀大路をまっすぐ北進すれば、平城宮（曹魏の九六城に相当する「宮城」）に突き当るわけである。（第26図参照）

図 なお、洛陽の坊（里）

(1) 坊（里）は、上商里などという固有名称で呼ばれていた。（参照 巻頭の光山図）

(2) 里には、十字状に交叉する道路があって、東西南北にそれぞれ里門（合計四つの門）が設けられていたという。（第十八章 洛陽の町の区画についての項における十字状の道路の交差点に四本柱を立てるうんぬんの記事を参照）

1 三世紀半ばころ曹魏の洛陽城にならって築かれた後国の都城の様式は、それ以降連綿と受け継がれていって、藤原京に至った。

あるいは、

1 三世紀半ばころ曹魏の洛陽城にならって築かれた後国の都城の様式は、それ以降連綿と受け継がれていって、藤原京に至った。

(1) 藤原京における坊（里）は、洛陽の場合と同様に、林坊などという固有名称で呼ばれた。

(2) また藤原京では、一つの坊は、洛陽城および長安城の場合と同じように十字状の小路で四つに区切られていた。

2 ところが、平城京の場合には、工夫が加えられた。

① 洛陽の街割りと同様に整然と区画され、各坊は正方形とされたものの、これらの各坊は、東西方向の三本の小路によって南北方向の三本の小路で十六の坪に分けられた

② そして、洛陽城や、長安城や、藤原京よりも合理的な地番制度が採用された、ということなのかも知れない。